帝都東京にさまよう曖昧な「日本人」

――帝国日本の言語政策を逆手に取った巫永福の「首と体」――

呉　亦昕

一、「日本語」を「武器」にする雑誌『フォルモサ』

一九三三年三月、王白淵[1]、呉坤煌[2]、張文環[3]、巫永福[4]ら東京に留学していた台湾人たちは、「眞に台湾人が必要とする新文芸[5]」の確立を目指して、「台湾芸術研究会」を結成した。この「台湾芸術研究会」は、「日本プロレタリア文化連盟（コップ）」の流れを汲む「台湾文化サークル」を合法組織として再建したもので、同年七月に、「麗しの島」を意味する機関誌『フォルモサ[6]』を創刊することになる。「創刊の辞[7]」は、まず「台湾は地理的には熱帯特有の自然に面接し、政治的人種的には、中国の属領から我国の殖民地に編入された特殊事情を有し、其の下に高砂民族、台湾人、内地人の三者が混居してゐる」という台湾の現状を述べ、「何故数千年の文化遺産と現在処する諸々の特殊事情の中に生きる人々の中から今迄に独特の文芸が生れなかつたか」について、「勇氣と団結力とが足らなかつた」ことを原因とし、従って「浅学非才な我等は此に鑑み、今立つて自ら先駆者となり、消極的には従来の微弱な文芸作品や現に民間に膾炙する歌謡及伝説等の郷土芸術を整理研究し、積極的には吾人の全精神を以て眞の台湾純文芸を創作する決心である」という趣旨を掲げている。また、「和文の文芸表現―これはわれらの将来の最も大いに活躍すべき唯一の武器である[8]」と唱え、誌面には日本語による創作が中心に掲載されたこの雑誌は、植民地期台湾における日本語純文学雑誌の隆盛に先鞭をつけたものであり、台湾人による文芸の方向に大きな示唆を与えた重要な文芸誌とされてきた。

創刊号の発行部数は五百部で、在京の主要新聞社、各会員、図書館、および台湾島内の同志に送られ、また台中の中央

書局を通じて五十部ほどが販売された。[9] 第二号は同年十二月、第三号は三四年六月に発行されたが、発行資金に行き詰まったために廃刊のやむなきに至った。しかし、「台湾芸術研究会」はのちに「台湾文芸聯盟」[10]の東京支部として活動を続ける。さらに、同人たちは帰台後、一九四〇年代の台湾文壇を担う人物となっていった。

ところで、民族主義に基づく「台湾新文学運動」[11]の一環と主唱しながら、帝国支配者の言語である「日本語」をもって「真の台湾文芸」を作ろうとする『フォルモサ』の実践は、今日の視点からみれば非常に矛盾をはらんでいるもののようにもみえる。にもかかわらず、『フォルモサ』は当時植民地化された台湾の人々に抵抗なく受け入れられたと思われるが、そのことは一体何を意味しているのか。単なる同化志向といって批判してしまうことも可能だが、『フォルモサ』の言語・文化の実践に、より複雑な戦略を読み込むことができるのではないだろうか。まったく抵抗がなかったかどうかはひとまず置くとしても、むしろ、こうした台湾の人々のの受容にこそ、台湾において日本語を書くことにまつわる権力関係の痕跡が刻印されるといえるはずである。一九一〇年前後生まれの若い『フォルモサ』同人たちは、初等教育から「同化政策」[12]に基づく「国語（日本語）教育」を受け、日本語の書籍、刊行物によって文学知識を吸収していた。それとともに、彼らの作家としての活動が盛んになった一九三〇年代には、日本内地の大手新聞紙が移入取次を通して次々と台湾での販売に力を入れ、帝国日本の「国語政策」下で台湾の日本語読者層が増大してきたことも見逃してはならない。つまり、彼らは「日本語」を用いることで、台湾そして台湾以外にも膨大な「読者」が得られるという可能性に、東京留学という台湾の外部での体験を通して気づいてしまったのであろう。

自ら進んで日本語の小説を書く行為は、植民地台湾の文学を日本文学の制度の周縁に押し込むことを意味する。しかし、それは同時に、日本語で編成された帝国の領域に、台湾で書かれた「日本語文学」が占めるべき場所（それがいかに周縁化されたものであれ）があることを、主張する行為でもあるだろう。また、言語植民地支配下で、日本語で小説を書かざるをえないという抑圧的状況を「真の台湾文学の創出」という夢に昇華しようとする『フォルモサ』の試みから、「日本語」自体の政治性が問われるという逆説的なプロセスも見出せるのではなかろうか。

そこで本論では、「台湾芸術研究会」は「日本語で何をしたか」に焦点を当て、『フォルモサ』創刊号に発表された巫永福の「首と体」という小説を取り上げて、その問題の事例研究の一つにしたいと思う。

二、「留学生小説」として読まれてきた「首と体」

一九三二年四月、十九歳の巫永福は医学科への進学をやめ、父親の反対を押し切って明治大学文芸科に入学した。在学中には山本有三や横光利一、小林秀雄、岸田国士、萩原朔太郎、米川正夫らの教えを受けたという。[13] また、当時同じく本郷に住む東洋大学中退の張文環と知り合い、これをきっかけとして三三年に東京で設立された「台湾芸術研究会」の同人になり、『フォルモサ』創刊号に「首と体」、第二号に詩「乞食・他二篇」と戯曲「紅緑賊」、第三号に小説「黒龍」を発表して注目を浴びた。

「首と体」は巫永福自身の処女作でもあり、語り手の「私」の「独白（モノローグ）」によって物語が構成されている。まずあらすじを紹介しておこう。

二日酔いの朝、「私」は友人のSと学校へ行く途中、偕行社の外壁にくっついている獅子の頭の噴水口を目にした。「私」は獅子に変わる色々の自分の姿を想像しながら、Sとその日の東京座の観劇（チェーホフの「桜の園」）について話した。放課後、「私共」二人は日比谷に出て、開演前に美松というデパートで時間をつぶすことにしたが、何かの原因でSは出ていってしまう。公園のトイレに行った「私」は便所前の手洗いにぶつかって、ふと見ると、それは「羊の頭」の形をした出水口であった。今日目にした二つの出水口が「平和な羊と強猛な獅子の首」というのは妙に暗示的であると「私」は考える。というのは、近頃Sが「首と体」に悩んでいるからである。彼は「頭（首）」では東京にとどまっていたいと思っているのだが、故郷の親が結婚問題で帰郷するようにと彼の「体」を要求している。「首と体」が相反した対立状況に置かれたSの境遇に対して、「私」は深い同情を寄せた。ふと「私」は美松でみた着物麗人の広告写真を思い出し、それがSの恋人の面影にそっくりなので、先のSの行動を諒解することができた。

観劇後、Sは突然帰郷することを決意した。

「私は国へ帰ろうと思ふ！私は芝居を見るより考へてたよ、父母のことをね」外へ出るとすぐ友が言つた悩みの声だ、彼は父母と自分と自分の恋人を考えてゐたのだらうか「私はあの問題を解決して来やうと思ふ、父母の意志に従ひながら私の意志を通さうと思ふ、重大な問題だからね、結婚は、孝と愛の衝突だらうか」（六五頁）（句読点は初出

のままにする。以下同。）

そして帰りに「私共」は神保町に寄ることにした。「私」はSに自分の幻想を話していると、目の前に「獅子の頭を持つた羊の体、獅子の体に羊の頭をくつつけた二匹の怪獣が加速度的に走つて来た、猛烈な勢いで衝突して」、「勝負がつかぬのにスフィンクスが出て来た」のを見る。そこで「私」は「これが人間といふものだらうか」と思った。そして送別の意味でカフェでも入ろうかと、二人は「新天地をブラつく」ことを考えた。

以上が「首と体」の梗概である。

象徴と幻想の表現を取り込んで新感覚派的な作風をとったこの作品は、プロレタリア文学を標榜する『フォルモサ』の中においてかなり異色な存在だといえよう。同時代評は現時点では見当たらないが、一九九〇年にこのテクストの中国語訳「首與體」が台北前衛出版社によって出版されて注目され、台湾文学史上重要な作品と評価されるようになった[14]。

たとえば陳芳明によれば、植民地知識人の思想（首）と行動（体）との間の相克、矛盾を論じる際、この小説は重要な思考の契機を提示しているものだとする。「体は日本にいるが、首は台湾にある」はずのSがかえって「体は帰郷するが、首は日本に残る」と考えるようになったことは、主体の価値転倒だったとして、その心身は作者巫永福自身の投影でありながら、「宗主国」と「故郷」の間に引き裂かれ、進むことも退くこともできない留学生たちの窮地をも示していると指摘している[15]。また、「獅子の頭を持つた羊の体、獅子の体に羊の頭をくつつけた」スフィンクスが、Sの「首」と「身体」の分裂を暗示するものであることは、いうまでもないだろう。陳建忠も同じ論点をふまえて、「留学生小説」の視点から「首と体」を次のように論じている。

東京における留学生活は、進歩と開放の可能を意味している。一方、恋愛、結婚の自由さえ許されていない故郷（台湾）は閉塞的、後進的なところとしてとらえられていることから、自由、理性を憧れる留学生たちが、どのように「首」と「体」の乖離に苦しみながら、「人」（台湾人？）としてのアイデンティティの選択問題に困惑を覚えたかが理解できよう[16]。

確かに、植民地統治を受容することと近代化を受容することとの二律背反に悩む植民地知識人の身体は、つねに不安定な分裂状態にある。とりわけ「帝都」に留学している植民地青年にとって、このような分裂は一層深刻になることが想像できる。また、主人公の「私」と友人Sとは、帝国ホテル、日比谷公園、神保町などをいかにも慣れた様子でうろついており、そこには帝都体験の礼賛が含まれているという陳建忠の指摘も首肯できる。[17]

だが本論で注目したいのは、「日本語」で書かれたこのテクストの中で、「私」とSについて「名前」や「出自」など自身のアイデンティティを示す表現が一切ないことである。つまり、この二人が「台湾人の東京留学生」であるということは、作者が巫永福という台湾人留学生で、台湾人留学生が同人として発行している『フォルモサ』に掲載されたという外部の条件によって知らされるだけなのだ。この作品を単に「留学生小説」として読んだならば、この肝心な部分を見落とす可能性があるかもしれない。

和泉司はこうした「台湾をぼかしつつ『東京』を身体化したかのような表現」[18]について注意を払っているが、「この『首と体』は台湾の結婚因習に苦しむ青年像を描いている、という一方で、『帝都』東京を体験しているということの優越感を隠せていないのである」[19]という結論に止まり、この設定の背後にある意図に関する検討は行っていない。

Sが、「私は国へ帰ろうと思ふ！」というとき、その「国」とはどこなのか。テクスト中には、これを解き明かす鍵がまったくないため、Sの「結婚問題」が台湾の旧習に起因する問題だと考えるのも無理がある。したがってSの「結婚問題」は、「日本」の、どこの地方の問題でもありえたはずだ。さらに追究すると、「私」とSとは出身地が同じかどうかも言及されていない。そうすると、九〇年代の先行研究が強調する「私」とSとを両面一体的な存在とする読みは危うくなってくるのではないかと思われる。

「独特な文芸」、「眞の台湾文学」を創出しようと語りながら、東京を舞台にし、帝国日本にとって外部あるいは周縁に位置付けられる外来者の「私共」の「故郷」を観念的に、かつまた曖昧化して捉える台湾人作家巫永福のこの奇妙な設定は、一体何を意味しているのか。本論ではこの点に注目し、帝国による言語・地理の再編成の諸問題を検討したいと思う。

三、東京にさまよう曖昧な「日本人」

「首と体」のなかでの「故郷」は、具体的な地名をもたず、都市への対抗の根拠としても危うくなってきているものとして描かれている。ここで注意すべきことは、このような「故郷」の表象は、まさに三〇年代の東京を舞台にしたからこそ成立できたということである。

「首と体」が発表されたのは一九三三年である。また、「私」とSが帝国ホテル演芸場で見たという「桜の園」を、実際の上演史で調べてみると、一九三三年一月に小山内薫の追悼公演として、青山杉作指導の「桜の園」が同演芸場で上演されていた記録があることから、このテクストを三〇年代初頭の文脈から読むことは、まず妥当であろう。では、「首と体」の舞台である当時の東京に関して述べてみよう。

恐慌のさなかの一九三〇年三月、関東大震災からの帝都復興記念式典が行われ、さらに満州事変翌年の一九三二年十月一日、隣接五郡八二町村を合併し、市域が拡張され、いわゆる「大東京」が実現している。巫永福が名古屋から上京したのもこの年であった。鈴木貞美がこの時期における東京観念の変容を次のように述べている。

> 東京が、日本の総ての中枢であることが、いわば勅令として発表され、世界に誇るべき都の建設の掛け声がかかったわけである。その背景には、関西に起こった遷都論に水を掛けることがひとつ、そして、第一次世界大戦の戦勝国として、〝ジャパン・アズ・ナンバー5〟くらいになった、かどうか知らないが、ともかくも激発する小作争議や労働争議を押さえ込み、国力を増大して、アジアに威をはらおうとする国家の姿勢がある。ここから官民の国家主義が台頭しはじめることになる。[21]

鈴木貞美が指摘するように、「国力を増大」する総力戦体制が強化されていく中で、ファシズムの言説空間に統合されていく文化の中心こそがまさにこの「大東京」なのである。伝統的な共同体の文化・言語の転換が行われ、国家権力の強力な介入による東京の巨大都市化に伴って「標準語」の思想が実現されたが、その背後には「方言」の文化の屈折したエネルギーが作用していた。この時期の日本内地において、民謡作成や郷土教育など「故郷」をめぐる議論はファシズムへ

の傾斜と連動して多く語られていた。また、「郷土研究の一分科として発達してきた」[21]方言研究がブームになり、「方言」採集を目的とする研究会が各地に作られ、専門誌もいくつか出されるようになったことを見逃してはならない。[22]一方、国語政策の反動として、標準語とは異質な言葉を使う労働者や、各地方の地域方言を使う農民たちの言葉を積極的に活用し、標準語的「日本語」が支配していた記述の一元化をも変えていこうとしたところに、プロレタリア文学が多くの読者を獲得した秘密があった。それは言語の多様化を通しての帝国日本への抵抗だったということができる。

このことが台湾の「日本語文学」を扱う本論にとって重要な意味をもつのは、琉球語・アイヌ語・台湾語・朝鮮語などの「外地言語」は日本語の方言になるかどうかの問題が議論に加えられたためである。[23]方言問題は植民地にとっては、植民地を日本の地方として配置するという、巧妙な支配論理の一部を形成していた。「国語—植民地諸言語」の関係を「標準語—方言」に置き換えようとするこの動きは、「帝国」の中核としての国民国家「日本」の再編成と結びつけることができるだろう。その意味では、この時期のプロレタリア文学運動が、「標準語」の抑圧に抗し、積極的に植民地と連動しようとしていることは象徴的である。

このようなプロレタリア系雑誌によって朝鮮や台湾小説の紹介・翻訳が活発に行われ、植民地出身の作家たちもそれを通じて日本文壇に進出していた。それに伴い、日本語による「植民地文学」という新たな文芸ジャンルがプロレタリア文化の下位ジャンルとして成立する。[24]こうした背景があることによって植民地の日本語文芸は、民族問題を階級的に考えるようになったということができる。

その結果、植民地言語は「日本語」という帝国言語を補完する周縁言語、すなわち方言としてのみ承認されることになってしまうが、反面、植民地青年に活躍の場を与えたのも事実である。雑誌『フォルモサ』もそういう背景の下で生み出されたのである。この意味で、テクスト全体が「日本語」によって覆われた「首と体」は、「方言」からの上昇、普遍への到達を目指していた作品としても読める。そこからは、「宗主国」と「植民地」、「普遍」と「地方的特殊性」、「標準語」と「方言」の、権力関係を問題化する姿勢は潜在しているが、テクストの表層には直接に見出せない。

しかしながら、曖昧化され任意の記号のような「私」とSが大東京をさまようこのテクストを、日本語を自由にあやつる植民地出身者が、自分もまた、帝国日本の地政学的・言語的地図のなかに占めるべき正当な位置をもつ者であることを、密やかな形で主張しているテクストと読むことはできないだろうか。この作品は、少なくとも表面的には、同一言語

をあやつるものには、均一な発話の機会を与えるものであるはずの、帝国の言語支配を逆手に取ったものだとも考えうる。「桜の園」という演劇が暗示しているように、このテクストは単に首と体の乖離を扱うだけではなく、そこから超克し、「新天地」を見出そうとする思想が確認できよう。Sは「孝の体を取るか、愛の首を取るか」というのではなく、「父母の意志に従ひながら私の意志を通」すための方法を考えている。Sの悩みに触発され、「私」も自らの想像の中で、最初は帝国を象徴する「獅子」に変身し、それは「チェホフの蛇」によって破壊され、つづいては平和な「羊」、さらに「獅頭羊身」、「獅身羊頭」という混種の怪物に交互に変化し、クライマックスの場面では正体がはっきりしない「スフィンクス」になる。

獅子の頭を持つた羊の体、獅子の体に羊の頭をくつつけた二匹の怪獣が加速度的に走つて来た、猛烈な勢いで衝突して来た、私は堪えられず眼をつむると彼のエヂプトのスフインクスがニヨキツと現れた。二つの怪物の勝負がつかぬのにスフインクスが出て来たので私は思わず面喰つてしまつた。

私は無意識で匙を口へ運んで居る。

私はスフインクスを考えた、何故スフインクスがあつたのだらうと、スフインクスはかつて或る王に依つて謎をかけられて居る、すると二匹の動物が一匹になつて何とも分からない胴体が両端に獅子と羊の頭をつけて居る、—これが人間といふものだらうか。(六六頁)

ここでいう「スフィンクス」は結局「何とも分からない」ものになっている。さらに「これが人間といふものだらうか」という問いかけがなされている。

自我の分裂をあらわすというより、調和でかつ不調和、適合でかつ不適合という混合したものをあらわしているのではないか。こうした「謎めいた」スフィンクスの象徴的存在として自らが位置づけられている「私」は、自己のなかの「他者性」を認め、異種混淆的な身体を受け入れることによって、「都市」も「故郷」も超越し得る新たなナショナリズムを創出しようとしていると考えられる。「私」とSは、意図的に「故郷」表象がぼかされていることによって、どこの人でも当てはまるようなスフィンクス的存在になり、帝都東京を核に拡張し続ける帝国がめざす一元的な文化空間の内部に内

包され始めた異種混交性を暴露する存在だといえよう。

四、東京の中心に生きる「私共」

実名のあげられない「故郷」と反対に、テクストの中には「東京」の地名を以下のようにたんねんに取りあげる場面が随所にある。

裸の街路樹、寂びれた街の風景を眺めて、学校が終ると午後一時開演なので三省堂前で他の二三の友達と別れ、時間のつぶしでもしやうかといふから私共二人はテクシイで日比谷まで運動にもなる、電車賃がはぶけるといふ利益のため行くことにした。錦町河岸の方へ帝劇前の濠を通つて日比谷へ出た。濠の水は風の方向へ漣を打つてゐた。水底の水草がそれにつれて揺れるやうに見へた。（二八三頁。傍線・筆者。以下同。）

「電車で帰ろう」

錦町河岸で乗り換へて駿河台でもう一度乗り換へる時「腹がへつたよ、何処かで食べに行かないか」と彼を誘ふた

「ぢや今晩は神保町の夜店をヒヤかして行かう。」彼は可笑しい程観念したやうに言ふ「暫く歩けないかも知れないからね」

もう夜店が出てゐた、宵口だから割りに人出があつた、寒いながら出て歩く人々に感心した、店を出して居る人々を哀れに思つたこんなに寒いのに—

「何処で食べやう」

「須田町にしやうかモーリにしやうか」

「何処かの喫茶へでも入るか」

「酒でもひつかけるつもりかい、止さう」（二六五頁）

ここで描かれた東京は、モダン都市や観光地としてではなく、「私共」の生活の場として表象されている。さらに、これらは東京の中心である「皇居」に限りなく近い場所である。

帝国のネットワークは、膨大な労働力を植民地やその近辺から吸い寄せていく次元を含んでいた。そうした次元に連なる様々な空間では、国家の権力装置や資本の移動と、旅する人々の身体がぶつかり合っていた。吉見俊哉は「グローバルシティの変貌」において、三〇年代の東京について以下のように論じた。

近代都市化というのは、少なくとも二つのフェイズを含んでいたのだということでした。第一は、様々なローカルな場にあった身体が東京に集合してくるプロセス、そして東京に住みついていって、もともとのローカルな場から切り離されて、しかし東京の中でもう一つのネットワークを形成してくるようなプロセスです。第二に、そういう人々が都市のメディアや消費空間の編成の中で、都会的な、いわば物語を消費する東京人としての二次的なアイデンティティを無意識のうちに身につけていくプロセスがあります。この二つのプロセスが、段階的に起きるというのではなく、むしろ矛盾を孕みながら重なり合い、絡まりあうことで、十九世紀末以降の都市の文化が構成されてきたように思えます。[15]

ここの「ローカルな場」は、植民地を含むものとして考えられてしかるべきだろう。震災直前まで東京市長を務め、また帝都復興事業の中心人物であった後藤新平が、初期の台湾統治や満州鉄道など日本の植民地経営に深く関わった人物であることが示すように、とりわけ二〇年代から三〇年代にかけて、帝都の文化空間と帝国＝植民地の文化空間は様々な水準で直結していた。「首と体」が東京を舞台にするのも、一元的な文化空間をめざす帝都東京において「ローカル」なものと首都的なものが重なり合うという矛盾を抱えていることの暗示を狙ったためではないかと筆者には思われる。

ここに巫永福の作為が認められるとすれば、彼の文芸は言語、文化の多様性を抑圧することで、帝国日本がめざす文化空間の一元化に潜む意図、すなわち、帝国による植民地支配を陰画的に暴露する抵抗の文芸であったと評価することができるのではなかろうか。

植民地帝国日本は、内なる「他者」の存在をあくまでも否定し、それを同化抑圧することに全力を傾注した。それは

「他者性」の根幹たる言語の消去まで敢行するほどのものであった。巫永福は「吾々の創作問題」で台湾文学における創作言語について次のように述べている。

台湾人は生蕃人を如何に教化感化したであらう。異文明だつた日本文化を吾々を如何変形したであらうか。さらに日本文化と同時に西洋文化は吾々に如何なるものをもたらしたであらうか。更に吾々が持つてゐる在来の姿がこれら後来の姿とは如何に相もつれて居るであらうか。更にまたかつて吾々が母国と呼んだところの中華民国の諸動性が台湾人に及ぼす影響は如何なるものであらうか。どの程度のものであるか。そして台湾の風土気候は如何に本質的に分布的な有利有害な諸事象を吾々台湾人に及ぼして居るであらうか。かくして吾々は考えなければならない。吾々台湾人はこれらの諸状態に順応していくための気質と性格を持つて居るといふことを。吾々の活動形式、習慣、言語、吾々の能力、吾々の食物と呼吸は常に外的な印象を受けて反復して居る。つまり吾々は遺伝的な諸性向と同時に根強い後天性を持つて居ることを考へなければならない。

吾々の言語は今では本島語と日本語と支那語との錯雑である、吾々の時代と環境と吾々が台湾人なるが故にこの情態に立ち至つたのだ。吾々は留意しなければならない。吾々はあらゆる影響下にあることを。吾々が台湾人風に行為し感覚してゐる。これは自然なことなのだ。これは大に注意すべきことなのだ。この理論から派生する時吾々の郷土文学を持つ。[26]

少々ものわかりがいいように見える発言だが、台湾の多重的性格をぬきさしならぬ現実として自らに引き受けることで、被植民者はあえて帝国日本の体制にすりより、その懐に入ることで、逆手に取るようなかたちで思想的な可能性を探り、帝国のいう「同一性」を打ち破っていこうとしたのかもしれない。その巫永福が目指したのは、「吾々の郷土文学」であった。

注

＊引用文中の旧字体の漢字は新字体に改めた。

(1) 一九〇二年―一九六五年。彰化二水の人。一九二三年に台湾総督府の推薦で東京美術学校師範科に入学。二六年から、盛岡女子師範学校の教諭に着任。三一年六月に詩集『棘の道』（台湾人が日本語で出版した最初の詩集）を出版している。

(2) 一九〇九年―一九八九年。南投の人。公学校を卒業後、台中師範学校に進学。その後一九二九年日本に留学し、名古屋第五中学校を経て、日本大学および明治大学で学んだ。

(3) 一九〇九年―一九七八年。嘉義梅山の人。公学校卒業後の一九二七年渡日し、岡山中学校に入学。三一年に東洋大学に進学する。

(4) 一九一三年―。台中埔里の出身で、埔里小学校卒業後、一九二七年台中第一中学校に進学、二九年日本に渡り、名古屋第五中学校に転学する。三二年四月に明治大学文芸科に入学する。

(5) 蘇維熊「同志諸君！！！（檄文）」一九三三年三月、所収：「東京台湾芸術研究会」『台湾総督府警察沿革誌』第二編中巻「台湾社会運動史」、台湾総督府警務局、一九三七年、五八頁。

(6) 「フォルモサ」とは、かつてポルトガル人が海から台湾を臨んで、"Illha Formosa!"（麗しき島）と歓喜の声をあげたことにより命名され、台湾のことをさす。また、当時のヨーロッパでは台湾を「フォルモサ」と呼ぶ。

(7) 蘇維熊「創刊之辭」『フォルモサ』創刊号、一九三三年七月、一頁。

(8) 楊行東「臺灣文藝界への待望」『フォルモサ』創刊号、一九三三年七月、二一頁。

(9) 施学習「台灣藝術研究會成立與福爾摩沙（Formosa）創刊」『台北文物』第三巻第二期、一九五四年八月。

(10) 「台湾芸術研究会」の結成に刺激され、一九三四年五月に台中市で台湾人作家を糾合した「第一回全島台湾文芸大会」が開催された。その決議によって、台湾人作家を中心にした最初の全島的な文芸団体「台湾文芸聯盟」が結成された。芸術至上主義ではなく、人生のための芸術と文芸の大衆化を目指し、機関誌『台湾文芸』を発行。三六年六月に総督府の弾圧によって解散。

(11) 一九二〇年半ばから、東京にいる台湾人留学生たちによって始まった近代文学運動である。ロシア革命（一九一七年）、朝鮮の三・一独立運動、中国の五・四運動（一九一九年）により大きな刺激を受けたという。「白話文」（北京語口語文）を主張する人たちは、文語文表現を主張する旧来の漢詩文創作者たちとの「新旧文学論争」や、台湾人の日常生活の一つである「台湾話文」による表現を主張する人々との「郷土文学論争」などの文学論争を続けながらその活動を活発させていった。

(12) 一九一九年に、今まで台湾で実施されてきた後藤新平の「漸進主義」と「隔離主義」を修正した「台湾教育令」が発布され、「内地延長主義」に沿って、台湾の学制を統一した。続いて一九二二年の「第二次台湾教育令」では「日台共学制」が導入される。この共学制によって、中等教育以上では「民族」による区別が撤廃され、初等教育では「国語＝日本語」を常用するか否かが区別の基準とされた。台湾人が日本人と同等の教育機会を得る可能性が開かれたように見えるが、選別の尺度が「国語」使用能力とされることで、差別化は変わらない。ただ、

進学可否というのは本人の努力いかんによる「能力」の問題にすり返られたのである。

(13) 巫永福『我的風霜歳月—巫永福回憶録』望春風文化、二〇〇三年。

(14) 張恆豪編／李鴛英訳『翁鬧・巫永福・王昶雄合集』（前衛出版、一九九〇年）の他に、沈萌華編『巫永福全集』第十冊「小説巻Ⅱ」（傳神福音、一九九六年）、許俊雅編『日據時期臺灣小説選讀』（萬巻楼、一九九八年）にも中国語に訳され、所収されている。

(15) 陳芳明「史芬克司的殖民地文學—『福爾摩沙』時期的巫永福」『左翼台灣—殖民地文學運動史論』前衛出版社、一九九八年。

(16) 陳建忠「困惑者—巫永福小説〈首典體〉中的留學生形象」『日據時期台灣作家論　現代性、本土性、殖民性』五南圖書、二〇〇四年、一三八頁、日本語訳は筆者によるもの。

(17) 前掲書、一三七頁—一三八頁。

(18) 和泉司「憧れの中央文壇—一九三〇年代の「台湾文壇」形成と「中央文壇」志向」『文学年報2　ポストコロニアルの地平』世織書房、二〇〇五年、一三四頁。

(19) 前掲書、一三五頁。

(20) 鈴木貞美『モダン都市の表現—自己・幻想・女性』白地社、一九九二年、三八—三九頁。

(21) 東條操「昭和の方言研究の三特質」『国語教育』第十六巻第五号、一九三一年五月、六九頁。

(22) 一九二八年に柳田国男の提唱で組織された方言研究会は一九三二年に東京方言学会、一九四〇年に日本方言学会となり、機関誌『方言研究』を発行。國學院大學で一九三一年に方言研究会が組織され『方言誌』を刊行。また、盛岡の研究者橘正一が『方言と土俗』を月刊で発行するなど、地方での研究も行われ、各地に「方言研究会」が組織される。（東條操「方言研究の歩み一国語調査委員会と東京方言学会と雑誌『方言』」『国語学』第三五集、一九五八年十二月、九八—九九頁）

(23) 例えば、東條操は「国語」の下位区分として「内地方言」と同時に「琉球方言」を設定している（『国語の方言区画』育英書院、一九二七年）。その一方で、「台湾語やアイヌ語は日本語とは別ば系統に属する」から「日本語の方言ではない」と述べ、「朝鮮語は嘗ては日本語と同型なりと云ふ学説も有つたが今は異論が多い。従つて之を国語の方言と見る事は遠慮すべきであらう」としている。（「方言の本質」『国語と国文学』第三六号、一九二七年四月、四七頁）

(24) 中根隆行『〈朝鮮〉表象の文化誌』新曜社、二〇〇四年、二四八頁。

(25) 吉見俊哉「グローバルシティの変貌」『現代思想』第二八巻第十一号、二〇〇〇年十月、五六頁。

(26) 巫永福「吾々の創作問題」『台湾文芸』創刊号、一九三四年十一月、五四—五五頁。